

第35回発展途上国研究奨励賞の表彰について

「発展途上国研究奨励賞」は発展途上国に関する社会科学およびその周辺分野の調査研究水準の向上と研究奨励に資するために、アジア経済研究所が1980年に創設しました。

表彰の対象は、発展途上国の経済およびこれに関連する諸事情を調査または分析した著作とし、次の①あるいは②に該当するものとします。

①前年1～12月の1年間に国内で公開された日本語または英語による図書、雑誌論文、調査報告、文献目録

②前年1～12月の1年間に海外で公開された日本人による英文図書

2014年度は各方面から推薦された34点を選考し、最終選考で下記の作品が第35回受賞作に選ばれました。表彰式は7月1日にジェトロ本部において行われました。

〈受賞作〉

『反市民の政治学——フィリピンの民主主義と道徳——』（法政大学出版局）

くさか わたる
日下 渉（名古屋大学大学院国際開発研究科准教授）

『ガーロコイレ——ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌——』（平凡社）

さくま ゆたか
佐久間 寛（東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教）

〈選考委員〉

委員長：長澤栄治（東京大学東洋文化研究所教授）、委員：杉村和彦（福井県立大学学術教養センター教授）、中西徹（東京大学大学院総合文化研究科教授）、広瀬崇子（専修大学法学部教授）、牧野文夫（法政大学経済学部教授）、白石隆（アジア経済研究所所長）

〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は受賞作のほか、次の4点でした。

1. 『イスラエル・パレスチナ和平交渉の政治過程——オスロ・プロセスの展開と挫折——』

（ミネルヴァ書房）

著者：江崎智絵（防衛大学校人文社会科学群国際関係学科准教授）

2. 『障害と開発の実証分析——社会モデルの観点から——』（勁草書房）

著者：森 壮也・山形辰史（ジェトロ・アジア経済研究所研究員）

3. 『中東湾岸諸国の民主化と政党システム』（明石書店）

著者：石黒大岳（ジェトロ・アジア経済研究所研究員）

4. 『東アジアとアジア太平洋——競合する地域統合——』（東京大学出版会）

著者：寺田 貴（同志社大学法学部法学研究科教授）

日下 渉『反市民の政治学——フィリピンの民主主義と道德——』

なか にし とおる
中 西 徹

本書は、ピープルズパワー以降のフィリピンの民主主義の動態を、「政治の道德化」に着目し、「二重公共圏」のせめぎ合いから分析した、極めて野心的かつ独創性の高い分析である。

著者は、まず、フィリピン政治におけるヘゲモニー的实践を、①「市民」という中間層と「大衆」という貧困層が共通の敵（腐敗した政治家・役人）に対抗するために一時的に連帯し「国民」となる「道德的ナショナリズム」、②「市民」が「大衆」のために政治家・役人を矯正し社会改革を実現しようとする「包摂的市民主義」、③「市民圏」という場で中間層が貧困層を排除しようとする「排他的市民主義」、④「大衆圏」という場で「大衆」が彼らを抑圧する「金持ち」に対立する「ポピュリズム」の4つに類型化する。そのうえで、「利益の政治」であれば階層間の所得分配政策によって解決が可能であるが、フィリピンの民主主義にあっては、「道德の政治」が階層間に固有の価値判断にもとづく感情的な排除の原理が働き両者の間に埋めがたい溝をもたらし、調停することが極めて困難な不安定性が現出したとする斬新な仮説が提示される。

そして、著者は、都市貧困層に密着した緻密な調査を行いつつ、マスメディアを含め、フィリピンで繰り広げられる多くの分野の言説を丹念に読み解き、中間層と貧困層への膨大かつ詳細なインタビュー結果にもとづいて、この仮説を検証しようとしている。この点で、本書は、

フィリピン政治に関する質の高い文化人類学的研究となっており、利用されている一次資料の価値も極めて高い。審査会において高く評価された理由である。

たしかに、本書に残された課題もある。まず、「政治の道德化」がもたらされたメカニズムをより積極的に論じる必要があったように思われる。たとえば、「大衆」から「市民」への階層移動についての突っ込んだ分析は不要なのだろうか。一世代ほど前までは貧困層に属し、その記憶を有する中間層も多い。対立の軸を階層移動過程からも論じる必要があるのではないだろうか。あるいは、富裕層などの外部諸力が対立を煽り、「分割統治戦略」を行っている可能性はないだろうか。「新自由主義」に言及するのであれば、「市民」と「大衆」の対立によって利益を得る人々の存在はもっと重視されるべきだろう。一次資料のより積極的な活用も望まれるという指摘もあった。「大衆圏」の人々の生活、その言説やモラルをよりダイナミックに描く素材が埋もれているように思われる。

しかし、このような課題は残るものの、先行研究の的確な批判的展望にもとづく本書の独創的な議論の展開とそれを支える地道な現地調査は高く評価されるべきである。審査員は全員一致で、本書はフィリピン政治についての本格的学術研究であり、発展途上国研究奨励賞にふさわしいと判断した。

(東京大学大学院総合文化研究科教授)

●受賞のことば——くさ か 日下 わたる 渉

このたびは、名誉ある発展途上国研究奨励賞を賜り、大変な光栄に存じております。選考委員の先生方、院生時代からご指導を賜っている清水展先生と岡崎晴輝先生、とても丁寧な編集をしてくださった奥田めぐみ氏、私を支えてくれた多くの方々に心より御礼を申し上げます。

拙著では、「政治の道徳化」が民主主義を脅かしていると論じました。政治の道徳化とは、資源の不平等な配分をめぐる問題が、善悪をめぐる道徳的対立によって上書きされ、隠蔽される現象を意味します。この着想は、マニラのスラムで暮らした経験から得ました。マニラでは、中間層と貧困層の生活空間と言説空間（英語とタガログ語）が分断されています。私は2つの世界を行き来しながら生活するうちに、両者では政治を語る道徳が異なると気づきました。

スラムでは芸能人への投票や票の売買が盛んです。また貧困層は、役人や警察に「みかじめ料」を渡して、不法占拠や街頭販売で生計を立てています。そのため、「法治主義」や「良い統治」を掲げる中間層は、国の発展を損なう悪者だと貧困層を道徳的に非難し、排除を強めてきました。しかし貧困層からすれば、都市で生き延びていくためには、不法な生計や票の売買といった非公式な手段に頼らざるを得ません。貧困層の生活基盤が不法なのは、彼らの道徳的問題ではなく、不平等な社会経済構造のためです。

一般に、民主主義には道徳的市民が不可欠だと主張されます。しかし、さまざまな構造的制約によって、どうしても「市民」になれない人々がいます。そのため、「正しき市民」の標榜は、特定の人々を「非市民」として排除する

ことに繋がり、民主主義の複数性を脅かしてしまいます。しかも、悪しき「非市民」とされた人々の声には耳が傾けられないため、社会には敵意や怨嗟が積み重なっていきかねません。

昨今の日本でも、福祉国家が解体し雇用が流動化するなか、自らの苦しさを他者に転嫁して、彼らの排除を叫ぶ政治の道徳化が進んでいるように思います。他方、フィリピンでは、国家が人々の生を保障しないため、道徳的に反目しながらも互いの生を支えあう実践が濃密にあります。また中間層と貧困層が、海外の移住先で道徳と階層を超えた新たな共同性を創出させることもあります。こうした実践に学びつつ、政治の道徳化に抗して、生の被傷性を支え合う共同性を民主主義の基盤にしていく方途を今後も考えていきたいです。

略歴

1977年埼玉県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。九州大学大学院比較社会文化学府博士課程単位取得退学、博士（比較社会文化）。京都大学人文科学研究所助教等を経て、2013年より名古屋大学大学院国際開発研究科准教授。

主要著作

「秩序構築の闘争と都市貧困層のエージェンシー」『アジア研究』53(4)、2007年（第6回アジア政経学会優秀論文賞）。

「フィリピン市民社会の隘路」『東南アジア研究』46(3)、2008年。

「境界線を浸食する『癒しの共同性』」『コンタクト・ゾーン』5、2012年。

佐久間寛『ガーロコイレ——ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌——』

すぎ むら かず ひこ
杉 村 和 彦

ニジェール川流域の小農村の19世紀末から21世紀初頭に至る歴史民族誌として、ニジェール西部の農村社会の土地をめぐる村落の分裂をきわめて詳細に描き出した大部の力作である。行政村の分裂というひとつの「事象」を通して、植民地主義や近代化というマクロな視点にも留意しつつ、それを一貫して内部からその意味をとらえなおすぐれた視点を有している。調査地で生じた問いを、先行研究を踏まえて考察する視点には、現象と対峙しつつその意味の広がりを取り出すフィールドワーカーとしての深い洞察力を感じさせる。また本書は「開発」にかかわる長期的視点をもった歴史人類学的研究ということもでき、そうした視点からも十分に評価できる作品である。

ただ上記の課題設定においては、著書のメインテーマとなった土地をめぐる村の分裂が、民族誌記述を旨とする氏の調査の最終段階ではじめて浮かび上がってきたものであるということもあり、テーマ自体の論点の深化にややもの足りなさもある。アフリカ農村の土地所有、土地保有のユニークネスに関する議論は、これまでも多くの研究者によって広範に展開されてきている。本書で取り上げた事象との関係が地域比較の視点からより詳細に考察されていれば、本書の研究のスケールと射程はより広がりをもつものとなったと思われる。

しかし、本書の中での著者の情動、自己の重

層性といった民族誌記述の最先端的領域を取り込んだ重厚な記述、調査者自身の位置を相対化した実験手法などとともに、土地所有をめぐる住民のモラルに着目した言説分析は説得的である。階層も含めた立場の違う住民のそれぞれの生きざまや人間性、想起される過去にも内在し、そうした人々との対話の中での著者の経験を、考察のためのひとつの資料として提示し、現象の意味を読み解く方法は興味深い。またそのことを通して、「土地は誰のものか」という土地制度研究の中での通常の問いの前提を、相対化しうるところまで練り上げた著者の自問自答の方法は、読者を引き込み、本書を、きわめて魅力的な書物に仕立てあげるものとなっている。

アフリカ農村研究の中でも、土地と親族の関係を詳細に描いた研究はこれまでもあるが、外部社会との関係での動態を、小さい農村の住民の土地との関係の間に作り出しているモラルとの関係を含めて描くことによって、これまでの開発研究の想定する平板な人間像と動態分析に風穴を開け、新しい視点を切り開いている。このようなミクロな視点にかかわるユニークな視角とともに、村落の分裂をそのリアリティに迫るかたちで、圧倒的な筆力で描き切った本書における記述全体は、開発研究にかかわる古典的なテーマを革新する新しい研究視点を示しているように思う。

(福井県立大学学術教養センター教授)

●受賞のことは——佐久間 寛^{さくま ゆたか}

本書は、西アフリカ・ニジェールに所在する行政村ガーロコイレの分裂を主題とした民族誌です。ターナー（V. W. Turner）の古典的研究 *Schism and Continuity in an African Society: A Study of Ndembu Village Life*（Manchester University Press, 1957）に代表されるように、「村」の分裂とはかならずしも珍しい民族誌の主題ではありませんが、本書には、おおむね以下2つの特徴があります。

第1は、古典的民族誌で描かれてきたのが、出自原理と居住規則の齟齬といった社会的論理をめぐる葛藤であったのに対し、本書の最大の関心事は、政府主導の農村開発によって引き起こされた土地をめぐる社会的葛藤、いわば国家と社会の葛藤だという点です。しかもこの葛藤は、冷戦崩壊前後のアフリカ研究で盛んに論じられた「国家に抵抗する社会」なる構図に還元できるほど単純なものではなく、国家と社会の葛藤が社会の内なる葛藤を連動的に引き起こした末に村を分裂させるという錯綜した過程としてしか捉えられないものでした。

第2の特徴は、この複雑な過程をとらえるため、私的ともいえる経験に注目した点です。そもそもニジェール西部農村社会の土地制度は、自らの土地を何者かに奪われるかもしれないという猜疑や恐怖を個のうちに誘発する仕組みを備えており、それこそが行政村分裂に帰結する状況を作り出していくのですが、調査時のわたしには、こうした葛藤に自らも巻きこまれた末に、人々から土地を奪う外部者（＝「白人司令官」という国家審級）とみなされていった形跡がありました。そこで本書では、わたし個人の

葛藤の経験を手がかりに、国家と社会、および社会内部の葛藤に接近することを試みました。

「わたし」を民族誌に記すことは、かつての人類学で「実験的」と評された手法です。本書にオーソドックスな社会科学研究を求める読者は、期待を裏切られることになるかもしれません。それだけに、こうして第35回発展途上国研究奨励賞を賜ったことは、身に余る栄誉と感じております。選者の皆様には、本書の完成度より今後の可能性を評価していただいたのではないのでしょうか。ご期待に応えるべく、いっそう精進していく所存です。

略歴

- 1976年 千葉県生まれ
- 2002年 明治大学大学院商学研究科商学専攻博士前期課程修了
- 2010年 東京外国語大学大学院地域文化研究科地域文化専攻博士後期課程退学
- 2013年 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員
- 2014年 同助教

主要著作

- 「ウラン開発と福島原発事故」『経済』225, 新日本出版社 2014年。
- 「祖先・奴隷・腹——ニジェール共和国ソングイ系社会における親族のモラル」『社会人類学年報』39, 弘文堂 2013年。
- 「交換, 所有, 生産——『贈与論』と同時代の経済思想」モース研究会編『マルセル・モースの世界』平凡社 2011年。